倫理，政治・経済

第１　高等学校教科担当教員の意見・評価

１　前　　文

令和４年度（第２回）大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）の「倫理，政治・経済」の追・再試験の問題は，大問７問で構成され，「倫理」分野から４問，「政治・経済」分野から３問が出題された。設問は，「倫理」分野から16問，「政治・経済」分野から16問であり，設問は全て単独科目からの引用で，配点は50点ずつであった。

ここでは，本年度の問題について報告書（本試験）14ページに記載の８つの観点から分析し，「倫理」と「政治・経済」それぞれの問題作成方針に基づいたものとなっているかどうかについて評価した。

２　内　容・範　囲

第１問　「友達」について（源流思想）

高校生の会話という場面から，友達との関係における悩みに関連して，先哲の様々な思想を問う問題設定である。友愛や賢明な友について，先哲の原典の読み取り，日常生活につなげて考察する学習過程が重視されている。原典読解が受験者にとって取り組みやすい内容であり，全体としてはやや平易な大問である。

問１　愛について考察した思想家ついて問われている。基本的知識から解答できる。

問２　先哲の文章から読み取れる内容と知識を組み合わせて解答する設問であり，仏教の理解が求められている。

問３　様々な先哲における知についての考え方が問われている。④のエピクロスは正文であるが，原子論まで正確に学習できていなかったのではないか。

問４　様々な先哲における人間関係についての考え方が問われている標準的な難易度の設問である。「逍遥遊」の境地や「八苦」の内容を十分に理解できない受験者がいたと思われる。

第２問　「役に立つ学び」について（日本思想）

生徒どうしや先生との会話などを通して「学び」について考え，自分自身のためだけにとどまらず，他者との関わりにおける学びの重要性も伝えている。また，Ⅱで用いられた生徒同士の「紙上での対話」は高校の授業改善のひとつのあり方を示唆するなど，メッセージ性のある大問である。各時代の出題バランスは適切であったが，全体的にやや難しい。

問１　日本における神々への信仰と仏教との関係について問う標準的な難易度の設問である。

問２　山崎闇斎についての知識と資料の読み取りを組み合わせた設問である。知識の部分と読み取りの部分の内容が全ての選択肢で異なっていたため，受験者は資料をより丁寧に読むことが求められたのではないか。

問３　誤っている選択肢の人物が分かっていれば正答は導けるが，叡尊は教科書本文での扱いが少ないため，判断に迷った受験者も多かったのではないか。

問４　空欄ａ，ｂともに資料を丁寧に読み取ることができれば正解を導ける平易な問題であるため，倫理的概念を組合せるなど工夫を期待したい。

第３問　人間の賢さについて（西洋近現代思想）

人間の賢さに関連した資料や会話文を元に，西洋近現代思想に関する知識だけでなく，思

考力を問う問題が含まれている。一つの設問で複数の資料や会話文を同時に参照する必要はなく，受験者は比較的取り組みやすかったと考えられる。標準的な難易度の大問である。

問１　機械論的自然観に関連する人物についての理解を問う。誤答の選択肢も部分的にそれぞれの人物の思想を示す言葉が入っているため，やや難易度の高い問題となっている。

問２　カントの思想についての標準的な難易度の問題。カントの理性についての思想に関わる用語を正確に理解していれば正答を導くことができる。

問３　キルケゴールとハイデガーの思想についての基本的な理解を問う標準的な難易度の問題。正誤問題についても，例えば，三つ以上の文章の正誤の組み合わせとして選択肢を増やすのではなく，このようにアとイ二つの文章についての正誤の組み合わせを四つの選択肢から判断するようなものが適当だと考えられる。

問４　会話文の趣旨についての読解力を問う比較的平易な問題。人間の思考と自然との関係について，ゲーテと，ハイデガーの思想をつなげて考えた会話という設定は，受験者にとって新鮮なものであると考えられる。倫理の学習過程を意識した場面設定である。

第４問　差別や偏見について（現代の諸課題と青年期）

単なる資料読み取り問題ではなく，倫理の知識を前提にして，同時に論理的思考力を試す設問が増えていくことが現場の期待であるが，取り上げられた思想家や題材は授業でも探究の切り口に使える素材が多い。とくに若い世代に関心をもって考えさせたい現実社会の諸課題を取り上げた出題者のねらいが推察できる。

問１　異なる文化や民族との関わり方についての設問。教科書レベルの学習で判断できるが，岡倉天心について触れることが少なかった受験者は迷いもあっただろう。

問２　子どもについて，２つの考察がそれぞれ誰のものであるかを組合せる設問。「第二の誕生」がルソーだということは平易に判別できるが，アリエスとハヴィガーストは区別が難しい。細部の知識を要求しているかのような誤解にならないとよい。

問３　ヌスバウムの著作を読んで内容理解を試す設問。単なる読解の問題としてではなく，身近なジェンダー問題や性別役割分業などに置き換えて選択肢が設定され，高校生目線で解釈する形式は，理の学びが現実問題と背中合わせであることの象徴として意義深い。

問４　冒頭の会話文を踏まえ，差別や偏見の問題を総括するまとめのような設問であり，大問全体を締めくくるのにふさわしい役割を果たしている。解答を通してテーマ全体を考えさせ，選択肢それぞれが授業でも取り上げやすい内容となっておりメッセージ性が強い。

第５問　政治の仕組み

「政治の仕組み」をテーマにした政治分野の問題であり，場面設定としては，学校で大学教員による出張講義が開かれたというものである。大問の導入部分に各設問をリードする文章や図がないことで各設問における場面設定に関する説明が多くなった面もみられるが，受験者にとっては解きやすい印象になったと考えられる。しかしその一方で，授業改善へのメッセージ性は弱くなったといえる。全体としての難易度は標準である。

問１　「主権」と「国家」の概念についての知識・理解を問う，標準的な設問である。

問２　地方制度改革についての基本的な知識・理解を問う，標準的な設問である。

問３　環境問題とそれに伴う法律や判例についての知識・理解を問う，やや平易な設問である。

問４　NGO（非政府組織）が主導的な役割を果たして採択された多国間条約についての知識・理解を問う設問である。条約の背景や内容の理解が求められる，やや難易度の高い設問である。

問５　四つの国際紛争について，これらの国際紛争の共通点を資料から考察させる設問である。資料の読み取りだけでなく知識の活用も必要とされる，標準的な設問である。

問６　国連安全保障理事会の決議案や各理事国の反応や意見を示した資料から採択の可能性について考察させる設問である。「政治・経済」で学習すべき合意形成のために必要な力が求められる設問でもあり，思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる，やや難易度の高い良問である。

第６問　大学の「経済学入門」のシラバス（講義実施要項）

「大学の『経済学入門』のシラバス」をテーマにした経済分野の問題であり，経済分野の幅広い内容を網羅している。大問の導入となるシラバスには各回の授業のテーマとキーワードが示され，そのテーマやキーワードから各設問が引き出されるという構造になっている。全体としての難易度は標準である。

問１　正規雇用や非正規雇用などの労働問題についての知識・理解を基に表を読み取らせた上で考察させる，標準的な設問である。

問２　1980年以降の世界経済の動向についての知識・理解を問う設問である。テレビ欄を使って出題することで時代背景を把握しやすく工夫されている，標準的な設問である。

問３　景気に関する業況判断指数について，表を読み取らせた上で考察させる，やや平易な設問である。

問４　日本，アメリカ，ドイツの食料自給率，国民負担率，二酸化炭素排出量の割合，公債依存度を示した表を読み取った上で，思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる，やや難易度の高い設問である。

問５　証券会社の業務についての詳細な知識・理解を問う，やや難易度の高い設問である。

問６　アダム・スミスとカール・マルクスの著作の内容についての知識・理解を問う設問である。資料が工夫されており，知識と読解力が求められる，やや難易度の高い設問である。

第７問　少子高齢化に伴う労働問題や社会保障の課題

「少子高齢化に伴う労働問題や社会保障の課題」をテーマにした政治分野と経済分野の融合問題であり，学習活動の場面におけるスマートフォンでの会話を題材としている。スマートフォンでの会話を各設問に反映させるなどの工夫がみられ，生徒が主体的に取り組んで学習を深めていく姿を見せている等のメッセージ性もある。全体としての難易度は標準である。

問１　日本の完全失業率とインフレ率との関係について，図を読み取らせた上で，読み取った内容と知識とを組み合わせて考察させる，標準的な設問である。

問２　日本の雇用慣行（年功序列型賃金）に関して，勤続年数と賃金水準の関係を示す図を基に考察させる設問である。図に説明を付けて考えやすくするなどの設定の工夫がみられ，思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる，平易な設問である。

問３　日本の年金制度についての時事的な要素を含む知識・理解を問う，やや難易度の高い設問である。

問４　日本の少子化の現状について，合計特殊出生率の推移と夫の休日の家事・育児時間に関する，二つの資料の読み取りの技能を問う，標準的な設問である。

以上の内容から，設問の内容は適切で，学習指導要領の定める範囲で出題されており，出題内容に大きな偏りはなかったと考える。

３　分　量・程　度

全体の設問数は，大問数７，総設問数32で，本試験の設問数と同じ適切な設問数であった。試験

全体の分量や文字数についても，「倫理」と「政治・経済」それぞれの問題作成方針を考慮すると適切なものであったと考える。

「倫理」の問題の難易度については，全体として，標準的な難易度であり，出題内容や出題の分野のバランスの面でも適切なものであった。資料の読解のみならず倫理的な知識を踏まえた資料の考察等，知識をより活用させる形での設問の工夫及び選択肢の工夫がみられた。

「政治・経済」の問題の難易度については，標準的な難易度の問題が多いといえ，資料から国連安全保障理事会の決議案の採択の可能性を考察させる問題など，良問も多いといえる。また，基本的な知識・理解を問う場合も，組み合わせて解答させるなど出題に工夫がみられ，基本的な知識・理解のみを問う問題は減少した。

4　表　現・形　式

各設問の文章表現・用語については，受験者にとっておおむね適切であった。

「倫理」の問題においては，先哲などの資料を読み取り，会話文中の空所を補充する出題形式は，知識や読解力を問うことのできる設問であり工夫がみられるが，類似した形式の出題がやや目立つ。今後，更に図や写真等を活用し，考察させる設問の工夫を期待したい。

「政治・経済」の問題においては，問題の場面設定について，生徒が授業について学習の準備をする場面，日常生活の中から課題を発見し解決方法を見出そうとする場面，資料やデータ等を基に考察する場面などがある。現代社会の諸課題について主体的に考察させ，公正な判断力を養い，良識ある公民として必要な資質・能力と態度を育てるという「政治・経済」の科目の目標に照らして適切であったと考えられる。

5　ま　　と　　め（総括的な評価）

共通テストの２回目となった本年度の追・再試験の問題は，知識や資料に基づく思考・判断に重点を置いた問題作成の傾向がより鮮明となっている。高等学校等の授業改善もより一層の工夫が求められることとなった。

「倫理」分野に関しては，追・再試験は，本試験に比べると知識の有無や，資料の読み取りのみによって正誤を判断させるような設問がやや多かった。本試験と同様に，知識の理解の質を問う設問や，知識を活用し，思考力・判断力・表現力等を用いて解くような設問を増加させるなど，共通テストの問題作成方針に基づいた作問の更なる工夫を期待したい。

「政治・経済」分野に関しては，生徒が主体的に活動する学習過程を意識した場面設定がなされ，そうした場面設定の中で主体的・対話的で深い学びを実現する授業をうながす工夫がみられた。今後も学習指導要領で求められる知識・技能を基に，様々な諸課題を多面的・多角的に考察させる，思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる設問などを期待したい。